

常照

第836号

天親菩薩考

真宗七高僧の二番目に挙げられ、龍樹と共に菩薩の尊称を持って宗祖が崇められる天親菩薩について、その生涯と教えを追ってみたいと思います。

いっお生まれに・・・

天親菩薩がいっお生まれになつたかについては、さまざまな説があります。これは釈尊についても、龍樹菩薩の生まれについても同様で

史書なきインドの限界ともいえま
す。

① 三世紀説

椎尾辯匡(二七〇〜三五〇)

② 四世紀説

宇井伯寿(三二〇〜四〇〇)

③ 五世紀説

高楠順次郎(四二〇〜五〇〇)

④ 六世紀説

ケルン、ワシリエフなど

※ヴァスバンドウ二人説

フラウヴァアルナーは天親(インド名ヴァスバンドウ)の年代論に諸説があることなどから説一切有部の『俱舍論』の作者と大乘の論者であるアサンガ(無著)の弟は別人として、それぞれ新ヴァスバンドウ、古ヴァスバンドウとすべきと主張し

た。これは天親菩薩の伝記である真諦訳『婆藪槃豆伝』や玄奘『大唐西域記』中の該当する箇所との整合性が無いのと膨大な論書を古と新ヴァスバンドゥに区分することができないことから、一般的に承認されているとは言えません。ただ舟橋水哉は二人説を認めつつ新ヴァスバンドゥの年代を羅什以前の四世紀に置いています。

天親それとも世親

宗祖著『尊号真像銘文』より「婆藪槃豆菩薩論曰」というのは、婆藪槃豆は天竺(インド)のことばなり。震旦(中国)には天親菩薩ともうす。またいまはいわく世親菩薩ともうす。旧訳(くやく)では天親、新訳では世親

菩薩ともうす。

東本願寺出版

『真宗聖典』五一七頁

ここで新訳というのは玄奘の訳語で、それ以前の羅什、真諦などの訳語が旧訳(くやく)とされています。その玄奘の『大唐西域記』では世親の遺跡

大城の中に古い伽藍がある。伐蘇畔度菩薩(原注 唐に世親と言う。旧に婆藪槃豆と曰い、訳して天親と曰う。訛謬なり)が数十年の間、ここで大小乗の諸種の異論を制作した所である。

平凡社中国古典文学大系二二

『大唐西域記』一七一頁

天親か世親かについては、世親を採用される方が多く、辞典などでは

「天親↓世親を見よ」とか天親という見出しがなかったりしています。天親か世親かという二つの相違はヴァスバンドウのヴァスにあります。Vasūの語はインド最古の文献『リグ・ヴェーダ』に頻出し、動詞のvas（光る・輝く）を語根として「明るい」「輝く」などの意味を持つ形容詞で主神インドラを修飾し、その異名ともなります。したがって真諦その他が「天」と訳したのは妥当と言えましょう。玄奘の真諦への対抗心がその後の法相宗に拡大され、新訳旧訳の語感ともあいまって（新のほうが良い？）世親が一般的になりました。ただ宗祖は天親の語を使われ続けられたように思われます。

小乗（？）から大乘へ

天親菩薩は三人兄弟の真ん中に生まれ、兄無著（アサンガ）に次いで説一切有部（以下有部）長で出家し、『俱舍論』など経量部的解釈を含みながらも、有部の教学を集大成した著作を発表しました。さて兄無著は弥勒の導きで大乘に転向していました。弟天親菩薩も大乘に転向させようと策をめぐらし仮病を使って天親菩薩を呼び寄せ必死の説得で大乘に転向させたと伝わっています。ここで有部というのは当時最大の仏教部派、経量部はその中の研究グループのようなものと思われています（櫻部説）弥勒については神話的な伝聞が多く、その實在

が疑われています。ここで大乘と小乗の関係について考えてみたいと思います。大乘の原語はマハーヤーナ小乗はヒーナヤーナでそれぞれ大きな乗物、小さな乗物の意味ですがマハーには「立派な」ヒーナには「劣った」の意味があり(日本語の大物、小物の関係と似ています)大乘の側から一方的にそう決めつけています。新訳と旧訳との関係と同じです。前世紀末にパリで開かれた世界宗教者会議で小乗という言葉は今後使わないと決められています。「差別のない社会の実現を目指す教団」として、さほど初期仏教、部派仏教の教理も知らないで小乗と侮辱することはいかななものかと思えます。

人類の知的遺産 14 『ヴァスバンドウ』を参考にしました。

九月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 九月七日(木)～十一日(月)
東海教区中勢組 正覚寺

講師 正親 一 宣 師

○後期 九月十三日(水)～十六日(土)

山口教区華松組 安楽寺
講師 金安 一 樹 師

○秋季彼岸会布教

九月二十一日(木)～二十三日(土)

北海道教区十勝組 玄誓寺

講師 上本 周 作 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使のご法話を頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

九月二十三日(土)は秋季彼岸会に御中日にあたりますので月忌参詣はお休みさせて頂きます。どうぞお寺にお参りください。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇二三四) 二二一〇七四四番
FAX (〇二三四) 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一一六一六番